

平成 2 2 年度病害虫発生予報第 3 号

平成 2 2 年 5 月 1 3 日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要

区 分	農 作 物 名	病 害 虫 名	発生時期	予想発生量
普通作物	イ ネ	いもち病(葉いもち)	平 年 並	平 年 並
		縞葉枯病(ヒメトビウンカ)	やや遅い	平 年 並
		ニカメイガ	やや遅い	少 ない
		イネミズゾウムシ	-	やや少ない
果 樹	ナ シ	黒斑病	平 年 並	平 年 並
		黒星病	平 年 並	やや多い
		クワコナカイガラムシ	やや遅い	やや多い
		ハダニ類	平 年 並	平 年 並
		アブラムシ類	平 年 並	平 年 並
	果樹全般	カメムシ類	平 年 並	やや多い
野 菜	ネ ギ	べと病	早 い	多 い
	スイカ	菌核病	平 年 並	やや多い
		つる枯病	平 年 並	平 年 並
		うどんこ病	平 年 並	平 年 並
	スイカ、メロン	アブラムシ類	やや遅い	平 年 並
ハダニ類		やや遅い	平 年 並	
	シ バ	葉腐病(ラージパッチ)	平 年 並	平 年 並

気象予報(抜粋)

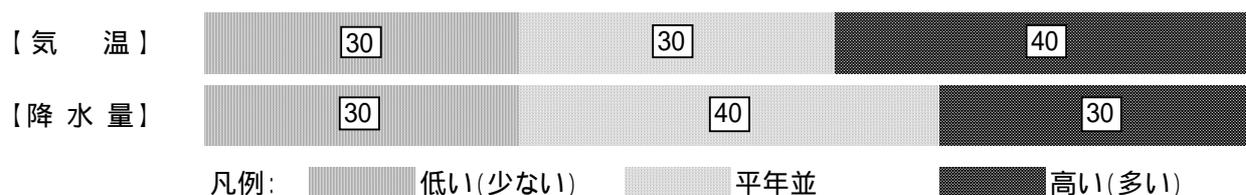
1 か月予報(5月8日～6月7日:5月7日、広島地方気象台発表)

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

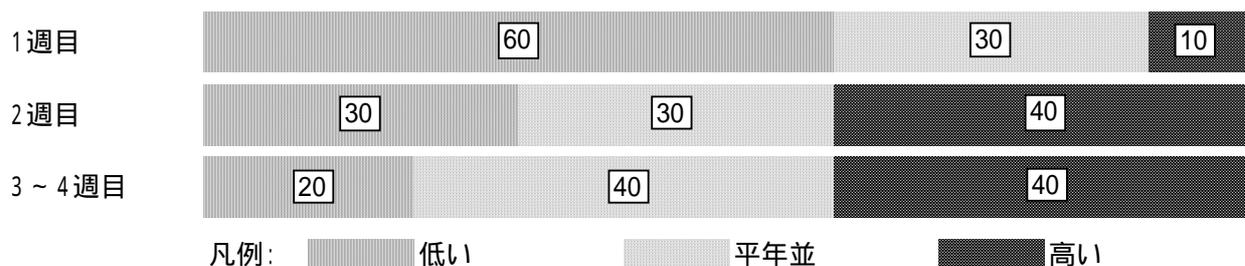
天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れる日が多いでしょう。

週別の気温は、1週目は低い確率60%、3～4週目は平年並または高い確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



< 気温経過の各階級の確率(%) >



普通作物

[イネ]

1 いもち病(葉いもち)

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 昨年の穂いもちの発生は平年並であったため、種子の保菌率は平年並と見込まれる。

イ 4月下旬～5月上旬の気象条件、向こう1か月の気象予報から、本病の発生は平年並と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 苗におけるいもち病は急激に蔓延するため、発生がみられた場合は直ちに葉いもち防除用粉剤又は水和剤を散布し、その後は病勢に応じて追加防除を行う。

イ 育苗箱施用剤を使用する場合は、使用時期及び使用量を守って均一に散布する。

ウ 山間部などのいもち病の常発地では、育苗箱施用剤を使用しても十分な効果が得られない場合があるので、ほ場の見回りなどを行い早期発見に努める。

エ 補植用置き苗が本田での発生源となることが多いので、補植後の残り苗は速やかに処分する。

2 縞葉枯病(ヒメトビウンカ)

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 やや遅い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア これまでの気温の推移、及び向こう1か月の気象予報から、本病を媒介するヒメトビウンカの発生時期は平年よりやや遅く、発生量はやや少ないと見込まれる。

イ 昨年の本病の発生は平年よりやや多かった。

(3) 防除上注意すべき事項

県東部などの常発地では、ヒメトビウンカに対して登録のある育苗箱施用剤を使用して防除を行う。

3 ニカメイガ

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 やや遅い
発生量 少ない

(2) 予報の根拠

ア これまでの気温の推移、及び向こう1か月の気象予報から、本虫の発生時期はやや遅いと見込まれる。

イ 昨年の第2世代幼虫の発生量は少なかったため、本虫の越冬量は少ないものと見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

近年、局地的ではあるが、発生が増加している地域がみられているので注意する。常発地では、本虫に対して登録のある育苗箱施用剤を使用して防除を行う。

4 イネミズゾウムシ

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月6日現在、予察灯への誘殺は確認されていない。

イ 5月12日現在、県東部の早期田植ほ場(4月下旬植え)への侵入は確認されているが、被害は軽微である。

ウ 前年の第1世代成虫の発生量はやや少なかった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗箱施用剤の防除効果が高いので、使用時期及び使用量を守って1箱ずつ均一に薬剤を散布する。

イ 育苗箱施用剤による防除を行っていても本田での食害が急増する場合には、追加防除を行う。

ウ 直播栽培などの育苗箱施用剤を使用していない水田において、被害葉が顕著に増加し、成虫密度が1株当たり0.5頭以上になった場合は、本虫に対して登録のある粒剤などで防除を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場(東伯郡北栄町)における開花期以降の孢子飛散数は平年を下回った。

イ 5月上旬に行った県内13園の巡回調査によると幼果のポリ袋検定法による発病果率は0.6%(平年:1.9%)と平年をやや下回った。

ウ 本年のナシ園における病芽及び枝病斑などの越冬菌密度は、平年に比べてやや低い、一部のナシ園では、越冬菌密度が県平均に比べてやや高い園が認められる。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 今後、気温の上昇とともに孢子飛散数の増加が予想されるため、出来るだけ早く小袋掛け作業を終了する。特に、降雨直後は孢子飛散数が増加するため、薬剤防除を徹底する。

イ 薬剤は、小袋掛け直前にユニックス顆粒水和剤47の1,500倍液、有機銅フロアブル(キノドーフロアブル又はドキリンフロアブル)1,000倍とポリオキシソルボン水和剤1,500倍の混用液、ポリベリン水和剤1,500倍液など、小袋掛け終了後にはジアリン水和剤600倍液などを散布する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、一部のナシ園で葉や幼果への発病が認められている。

イ 昨年の本病の発生は全般的にやや多く、病芽率などの越冬菌密度の高い園が散見された。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いものと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病した幼果や葉は取り除き、園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤は、ユニックス顆粒水和剤47の2,000倍液、チウラムフロアブル(トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル)500倍液、有機銅フロアブル(キノドーフロアブル又はドキリンフロアブル)1,000倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ベルコートフロアブル1,500倍液などを散布する。

3 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 前年度、本害虫による果実被害はやや多かった。

イ 越冬卵のふ化開始は、平年より6日遅い5月6日(平年:4月30日)に認められたことから、ふ化最盛期は5月9日前後(平年:5月4日)と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 昨年、被害の多かった園や多発園では5~7日間隔で、次の時期に2回の防除を行う。

・ 幼虫ふ化最盛期 5月 9~13日

・ 幼虫ふ化終期 5月14~18日

少発園では5月13日前後に1回防除を行う。

イ 薬剤は、スプラサイド水和剤 1,500 倍液又はアプロード水和剤 1,000 倍液などを使用する。

ウ 越冬世代は、第 1 世代及び第 2 世代よりふ化時期が揃いやすいので、防除を徹底する。

エ 薬剤の散布にあたっては、クワコナカイガラムシが集合する枝葉の他、枝の切り口及び粗皮下などにも薬液が十分かかるようにする。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア クワオオハダニの越冬卵のふ化最盛日は、平年より 3 日遅い 4 月 27 日（平年：4 月 24 日）であった。

イ 5 月上旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）におけるハダニ類の発生は平年並となっている。

(3) 防除上注意すべき事項

ハダニ類の発生が多い園では、カネマイトフロアブル 1,500 倍液などを散布する。

5 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5 月第 2 半旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）におけるワタアブラムシの寄生新梢率は 15.9%（平年：18.0%）で、ほぼ平年並となっている。

イ 向こう 1 か月の気象予報から、第 1 回目の発生盛期はほぼ平年並の 5 月第 3 ~ 4 半旬と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア アブラムシ類の発生が多く認められるナシ園では、アドマイヤーフロアブル 5,000 倍液又はウララ DF 4,000 倍液などを散布する。

イ アドマイヤーフロアブルの使用にあたっては、連用による薬剤抵抗性の発達を避けるため、年 1 回の使用とする。

[果樹全般]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5 月上旬現在、チャバネアオカメムシの予察灯における誘殺数は平年並、集合フェロモントラップにおける誘殺数はやや多くなっている。

イ 向こう 1 か月の気象予報から、カメムシ類の発生時期はほぼ平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア カメムシ類の発生が認められる園では、ジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）2,000倍液などを散布する。

野 菜

[ネギ]

1 ベと病

(1) 予報の内容（平成22年4月14日付、病害虫発生予察注意報第1号発表）

発生時期 早い

発生量 多い

(2) 予報の根拠

ア 本年の現地白ネギほ場における本病の発生時期は、平年と比べて早い4月上旬であった。

イ 5月上旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年と比べて多い。

ウ 本病は、15～20程度の気温で降雨が続くと発病が増加するが、向こう1か月の気象予報から、発生量は引き続き多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

平成22年度病害虫発生予察注意報第1号を参照

[スイカ]

1 菌核病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年と比べてやや多い。

イ 本病はやや低温（15～20）で、降雨が続くと発生が多くなる。向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないように換気を行う。咲き終わった花弁は早く摘み取って除去する。

イ 薬剤は、ベルコート水和剤1,000倍液、カンタスドライフロアブル1,000倍液、ロブラール水和剤1,000倍液などを散布する。

ウ 曇雨天が続く場合は、ハウスではスミレックスくん煙顆粒6g/100m³（床面積50m²×高さ2m）、ロブラールくん煙剤100g/300～400m³（高さ2m、床面積150～200m²）などを使用する。

2 つる枯病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 本病は降雨や過湿によって発病が増加するが、向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないように換気を行う。トンネル栽培のスイカでは、茎葉に雨がなるべく当たらないようにトンネルを開閉する。

イ 本病は、株元や雨滴のあたる箇所から発病しやすいので、薬剤散布は株元にも薬液が付着するように丁寧に行う。

ウ 薬剤は、マンゼブ水和剤（ペンコゼブフロアブル又はジマンダイセン水和剤）600倍液、アントラコール顆粒水和剤600倍液、ダコニール1000の1,000倍液などを散布する。

3 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は、25前後の気温と適度な湿度で発病が増加するが、向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病は、収穫期の草勢低下により発生が多くなるので、初期防除を徹底する。

イ 発生前には、ベルコート水和剤1,000倍液などを散布する。

ウ 既に発病のみられるほ場では、トリフミン水和剤5,000倍液などを散布する。

エ つる枯病が同時に発生している場合には、ポリベリン水和剤1,000倍液などを散布する。

[スイカ、メロン]

1 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）における有翅アブラムシ類の黄色水盤への飛来量はやや少ない。また、現地調査ほ場におけるワタアブラムシの発生量は平年と比べてやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや遅く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスの換気部分や出入口には寒冷紗被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。

イ 発生初期の防除に努める。スイカのハウス栽培では、着果後にウララDF2,000倍液などを散布し、その後発生した場合にはアドマイヤー水和剤2,000倍液などを散布する。

- ウ スイカのトンネル栽培では、ツル引き誘引時期にチェス顆粒水和剤 5,000 倍液、交配前にバリアード顆粒水和剤 4,000 倍液、着果後にウララ DF 2,000 倍液などを散布する。
- エ メロンでは、チェス顆粒水和剤 5,000 倍液、モスピラン水溶剤 8,000 倍液、ウララ DF 2,000 倍液などを散布する。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期	やや遅い
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 5月上旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）及び現地調査ほ場において、ハダニ類の発生は認められていない。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや遅く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

スイカ、メロンともに、発生初期にバロックフロアブル 2,000 倍液を散布する。その後、発生がみられる場合はマイトコーネフロアブル 1,000 倍液、ダニサラバフロアブル 1,000 倍液などを散布し、多発した場合にはコロマイト乳剤 1,000 倍液を散布する。

[シバ]

1 葉腐病（ラージパッチ）

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 5月上旬現在、現地生産芝ほ場での本病の発生量は平年並である。
- イ 本病は降雨によって発病が増加するが、向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本病の発生前にセレントーフ顆粒水和剤 0.5 g / m²を 0.1 ~ 0.5 L / m²散布する。
- イ 既にパッチがみられる場合は、発病部位を中心にグランサー水和剤 500 倍液 0.5 L / m²、バリダシン液剤 5 の 500 倍液 0.5 ~ 1 L / m²などをスポット散布する。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。
詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類など）、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-0723

E-mail : boujyot@titan.ocn.ne.jp

次回の予報発表は、6月3日（木）の予定です。